グループ病院間における業務の効率化と輸血の安全性向上への取り組み

◎五十嵐 健一[1)]、佐々木 敦史[1)]、遠藤 亜希[1)]、小林 美穂[1)]、菊池 充[1)]
JA とりで総合医療センター[1)]

【はじめに】経営母体が同一のグループ病院でもその規模は様々であり、業務の運用は各施設に任されることが多い。JA 茨城県厚生連は病院間で業務内容を情報共有し、是正と標準化に取り組む「診療技術部門業務改善組織運営プロジェクト」（以下プロジェクト）を発足させた。令和 4 年度、輸血部門は業務の効率化と安全性向上を目的に活動を行ったので報告する。【方法】茨城県厚生連 6 病院の輸血部門代表者による会議の結果、令和 4 年度は業務の運用改善に取り組むため以下の活動を行うこととした。活動①：各施設の業務内容や運用を情報共有した上で、他施設の業務において改善すべきと思う点に是正を提案し、それぞれが改善に取り組む。活動②：施設の運用に応じて「日当直者輸血研修の実施体制」を構築する。【結果】①他施設の運用に対し 22 項目の課題が示された。具体的には「日当直帯の自動機器の運用」、「製剤在庫数削減」、「輸血前後感染症検査の実施体制」などが挙げられ、その内 14 項目の運用が改善された。②定期的(年 1 回以上)に研修を実施している施設は 3 施設のみであったが、全施設が研修の年間計画を策定するに至った。また令和 4 年度は 5 施設において研修実績が得られた。【考察】各施設の業務内容を詳細に把握できたことが、多くの課題を引き出すきっかけになったと思われた。他施設へ是正を提案する際は、自身もガイドラインなどを熟知する必要があるため、本プロジェクトが自施設の運用を客観的に評価する契機にもなったと感じた。また日当直者研修はマニュアルがなく、その内容は実施施設に委ねられているが、定期的に実施している 3 施設の研修内容を共有し指標としたことが、施設に適した研修計画の策定に繋がったと考えられた。【まとめ】グループ 6 病院の業務内容を情報共有できたことにより一定の成果が得られ、業務の効率化など輸血の安全性向上に寄与したことが推察された。また本プロジェクトは、経験の浅い技師が多い施設が、異常症例を解決する際の有用なツールにもなり得ると思われた。今後も情報交換の場として活用し、更に輸血の安全性向上に努めていきたい。